



Do you wanna smoke ?

写真/文 越智 隆治

僕は基本的に酒もタバコの類もあまり好きではない。どちらも、それ自体を「美味しい」と思ったことは一度も無い。妻もタバコは吸わないし、酒も一滴も飲まない人だから、僕も家ではまったくやらない。しかし、取材でいろいろな国を訪れると、様々な習慣があり、当然のことながら、酒を飲むことや、タバコを吸うことが重要なコミュニケーションになる事が多い。

インドネシアのメナドに行くと、ちょっと変わった甘い味と香りのする、常緑高木の「丁子」の皮と花のつぼみを混ぜたタバコを現地の人たちが吸っている。ガラムとか123(ジーサムソー)といった銘柄で、日本でも僕が大学生時代にちょっと流行っていた。ロケで訪れると、ダイビングボートの現地人クルーたちに良く勧められる。僕はほとんどの場合、断らずに彼らの横でその甘い香りのタバコを吸いながら、彼らとの会話を楽しむ。

パラオやヤップなどでは、ビンロージュの木の実にライムをふりかけ、葉に包んだ嗜みタバコのようなものを良くもらう。渋くて決して美味しいものではない。口内に真っ赤な色の、渋みの強い嗜み汁が充満するのも、慣れるまではちょっと気持ち悪かった。しかし、これを嗜むと身体が温まるので、最近では天気の良い日などは率先してクルーの持っているものを、もらいビンロー(ヤップではチューと呼んでいた)するようにしている。

酒はだいたい地元のビールを飲むことが多いのだが、僕はアルコールが入ると基本的にすぐ顔が真っ赤になって陽気になる。酒やタバコそのものを嗜むよりも、その場の雰囲気を楽しみたいから飲む。そんな感じだ。最近初めて訪れたエジプトはイスラム教の国だから、

もちろん地元の人にはほとんど人前でアルコールを飲まない。だから僕も食事の時に飲むのはコーカかミネラルウォーターだ。しかし、この国では、食事やお茶をするときにシーシャという「水タバコ」を吸う習慣がある。訪れたシャルエルムシェイク、アレキサンドリアなどでは、涼しくなる夜になると繁華な通りに面していくつも軒を並べるオープンカフェは、シーシャを吸いながらゆったりと会話を楽しむ人々と賑わっていた。僕はこのシーシャがとても気に入った。ガラスとアルミで作られた細長い水タバコ用の大きな器具。吸うと、一番下のガラス容器の中の水がポコポコと音を立てて煙が充満するのを見るだけでも面白い。

これを吸っていると、一緒にいるエジプト人日本語ガイドとドライバーのアラビア語の会話が理解できなくても、手持ち無沙汰になることも無く、なんだか自然体でその場に居る気がしたのだ。

こういう場合、大抵決まって話題に登るのが好みの女性の話し。エジプトでは、おしりの大きな女性が魅力的とされるらしい。僕ら3人は、アレキサンドリアの海岸沿いのオープンカフェで、シーシャを嗜みながら、行き過ぎる女性のおしりチェックを始めた。顔も見ないであんなに真剣に女性のおしりを見続けたのは初めてだったと思う。

「あの子はどうか？最高のおしりをしていますね」「いやあ、おっきすぎるかな～」、「じゃあ、あの子は？」「う～ん、もうちょっと」「じゃあ、あの女性は？」「いや～、し、しいてあげれば、あの子くらいなら」とかなり妥協案を提示したつもりだったのだが、「あれでは、小さすぎます！健康的では無いですよ！おっかしいですね。せめてあのくらいは必要です！」って力説した、僕より12歳年下のその日本語ガイドは、おしりの小さな日本人女性と婚約している。

こんな無意味な会話で盛り上がるだけで、ちょっと現地の人たちとの距離が縮まる気がする。そんな生活を僕はとっても気に入っている。

People
Photo Column by the Sea 05